

たより

「美紗の会」 ニユース

第39号

平成十四年四月十日

発行者
「美紗の会」
03-3441-2726
編集責任者
大久保 朋子

春風さんや主の情けで

西松布 咏

春風さんや 主の情けで咲いた
たじやないか なぜに吹いたか
夕べの嵐

まだうら若き頃よく口ずさんだ小唄である。恋の行方に向けひきを桜の散り際に託した描写が、なんとも切なくなまめかしく、唄うたびに心の闇を桜色に染めたものだった。そしてこの春、世情が、まるで桜に乗り移ったかの如く、仇花のようにパッと咲き、幻想に浸る暇もなく一陣の風と冷たい雨と共に過ぎてしまった。しかし唄は過ぎし後も、その情景を鮮やかによみがえらせてくれる。決して押しつけるのではなく、昔どこかで聞いたかも知れない遠くからかすかに響いてくる「哀愁」の音のように。かつてヨーロッパで端唄を聞いた阿部次郎は、この音を「しめやかな哀音」「溢れ出る感情を抑えたむせぶような幽かな魂の訴え」と表現したという。東洋のルソーと言われた中江兆民は「一年有半、統一有半」の随筆の中で、日本の三味線音楽にぞつこんだつたことに触れ、常磐津・清元・長唄の話を綴った後、歌沢に至つては「その中実で寸鉄人を殺す者あり」とまで書いている。私自身なぜこれ程までに三味線音楽にひかれていったか深く考えもしなかつたが、やはり本来あるべき人間の心の叫びが潜んでいるからなのだ

思うようになった。自然の描写や遊女の切ない言葉の陰に昇華出来ない魂のゆらぎが、とおしい程に語りかけてくる。なぜに吹いたか夕べの嵐の一節は、毎日のように繰り返される政治のドタバタ劇、人間不信に怒りを通り越した我々の悲しいつぶやきのようではないか……。そんな時には、気をとり直して、「程々に色気もあつて品も良く、さらりと冷たくない女に逢つてみたいような春の宵。などと鼻歌まじりにほろ酔い気分であつてみたい。今、美紗の会は、さまざまな場で活躍している老若男女

が、ひととき浮世を忘れ三筋の糸に耳を澄ませ、先達の残していった言葉を自分の心の中で反芻し、個々の特長が浮彫りされた新しい唄となつて紡ぎ出される楽しい会として注目されている。一曲を生み出すには、楽しいばかりでなく、さまざまな約束事、ぶつかり、糸と唄の微妙なずれを埋めてゆく忍耐の時があるけれども、遠くから聞こえてきた言葉や音が、だんだん近くなり、昔が今にやみがえる。そしていつしかまるでやかに熟成し、知らず知らずのうちにふんわり心が開放されてゆく。それがそれが長年迷ひ苦しみがらたどりついた「ふりかえる未来」であるとしてゆきたいと思ひます

「情念の世界」によせて

川崎隆 章

二月二十二日の夕刻、小田急線新百合ヶ丘駅北口にある「新百合二十一ホール」で行われた「情念の世界」は、これから丁度逢魔が刻に差しかかるうかろうという午後四時すぎ日は落ち、暮はあがつたのでありました。

最初に登場したのが荒井姿水さんの琵琶、松田裕之さんの笛そして加藤孝子さんの舞による創作舞踊「老椿」。この物語はどうかやういふ伝へではなく、八百年を超えるという古齢にあやかつた古い椿の創作で、主人公は「人魚を食

いしむくひにて不死になりたる宿世」を背負つてしまひ「花ならば散りゆきてこそまた咲くものを」と永遠の命を授かつてしまつた運命を呪う巫女の物語なのです。「落ちる木のうらやましさ」に身をよじり、「水汲み上げる水車」に自らの人生を喩え「長き命ぞ恨みなる」と白玉椿を手植ぞして「今ははや白玉椿の椿なつて踊りけり」という悲しくも遙か彼方の物語なのであります。永遠の命！それを求めて人々はアレコレや工夫した

りして端々というのに、いざ授かつてみれば、それは終わり亡き生々流転の道であつた。世界一の長寿国であることを祝う傍らで、終わりある命の意味を問うと、やういふ、なんとも複雑な美しさを称えた世界も、現存の古本をヒントに創作して問ひ掛けてくれる、今こそ思いまされる問題作だと思ひました。

ここでウーンと気持ち深まったところで馬場あき子先生による「橋姫」の由来に関する講演がありました。

橋姫の話は京に住まひし一對の夫婦をめぐるといふ物語で、仕舞「鉄輪（かなわ）」として今に伝えられています。物語の発端は夫の浮気。若い女にウツスを抜かれ、家に寄り付かなくなつたのを悲しんだ妻が、その恨みをはらさんと貴船神社に駆け込むという前段の物語があつて、仕舞が始まります。

馬場先生によると、中世、妻としてできることは「呪いをかける」「殺害を頼む」「鬼になつて手向う」この三つしかなかつたのだと、貴船神社は「鬼になつて憎い男を取り殺す」ための駆け込み場になつていたのだと、すももも貴船神社に恨みの祈りを捧げるようになったのは、男に捨てられた泉式部が貴船神社に祈つたという言い伝えに由来しているのだと、未だに境内の樹木に真新しい釘や人形が打ち付けられていることもあるのだと、すももも、駆け込んだ妻が祈りを捧げ、願ひを手順に、鬼になるための手順が神に託されました。それはまず、髪を五つにわけて束ね、そこに、逆さにした鉄輪を結びつけて、逆にした鼎のようなものを作る。そして、鼎の三本の脚にたいまつを付け、顔に朱塗りをして、さらに口にたいまつをくわえて都大路を南下せよ、というものでした。これで鬼に

なれるといふのです。

ところが、鬼になつた妻は、大路を南下し、いざ男の居所まで行つたところで、なぜか力を失つて引き返してゆきました。

鬼になれば、恨む相手を取り殺しても罪に問われなかつたのだと、すももも、鬼になつた者ばかりいふたん鬼になつた者は人住む里、あるいは都には帰れないまじりになつていたと、事実上、捨て身の復讐には変わりありません。

橋の向こうに行つてしまわなければならなかつたといふことで、やがてそれは転化して橋の守り神「橋姫」になつたといふこと。

愛という言葉が今のように使われる以前、日本では「恋」といふことばがその位置を占めていたのだと、すももも、古くは「こひ」「相聞」とも言われ、万葉集では「孤悲」といふ字が宛てられ、手に入らないものを「乞ひとる」。気持ちに由来するといふこと。そんな時代、手が届かなくなつてしまつた男への恋の苦しみを克服するには、自らの弱さを逆転して負の力、つまり「鬼」といふ立場を選んで、立ち向つてゆくしかなかつたのだと、馬場先生は解説されています。

講演に続き、まずは津村禮次郎さんの仕舞によつて「鉄輪」が演じられました。仕舞では鬼になつて取り殺そうと立ち向う妻が、責め蒙る悪鬼の神通力自在の勢い絶えて、「力もたよたよ」と失つて、引き返すまでの様子、恨みの言葉が断片的に扶みつつ情景描写の積み重ねで語られます。

一方、続けて上演された、女流義太夫・竹本朝重さんの語りによる馬場あき子先生作詞の「橋姫」と、同じ詞に吾らが西松布咏師が作曲した「創作舞踊・橋姫」(唄・三味線・西松布咏・松田弘之・

笛、加藤孝子・舞踊)は「蜘蛛の糸に荒れたる駒は繋ぐとも二道(ふたみち)かくる徒びとを」とただならぬ状況描写からドラマチックに始まります。この「橋姫」には「恨みながら恋しや」という副題も宛てられています。

馬場先生は、講演の終りに、鉄輪の物語に今日的な解釈を呈されておりましたが、それは「取り殺そうとしたその手は、かつてその男を抱いた手であつた」といふ「手の記憶」(または身体に甦つた記憶)によつて女は殺生をやめたのだ、といふ説でした。

この「身体に甦つた記憶」を孕んだ「橋姫」恨みながら恋しや」は、吾らが師匠の作・演によつて、さらに重層的な世界へと向つてゆきました。

そこには書かれた以上のいふろんな時代の情念を連想させるものがあります。

泉式部にまつた貴船神社の由来。そこを舞台とした中世の伝説。その思いを江戸時代の手法を経て現代の作家・演者があらわしてゆく。そこには、それぞれの時代の、恋にかかわつた全ての人の身体に記憶が寄り添っています。

まさに芸の力といふものは、時代の大路を上り下りしては、ろんな時代の想いを複雑に重ねあわせながら描き出すところにあるのだと思ひます。今これを見ては、いにしえより来た魂であり、今を生きる身体でもある。まさに「情念」といふものはあらゆる境界を超えて、人々の想いを通じあう鍵なのだ、とも思ひました。

「貴船の神に申しつつ 恨みの鬼となつて 人に思ひ知らせん うき人に思ひ知らせん」千年を超えて、今もなおその声は伝わつてくるようです。もしかしたら古い椿の木が耳元でささやいてるのかもしれないが。

